

日本の名作名文ハイライト

# ピアノ

芥川龍之介

朗読 殿下信平

出所 お耳拝借 和み庵

<http://www.voiceblog.jp/tonosita>

teabreak 編

## ピアノ 芥川龍之介

ある雨のふる秋の日、わたしはある人を訪ねる為に横浜の山手を歩いて行った。この辺の荒廃は震災当時とほとんど変わっていなかった。もし少しでも変わっているとすれば、それは一面にスレートの屋根や練瓦の壁の落ち重なった中に藜の伸びているだけだった。現にある家の崩れた跡には覆をあげた弓なりのピアノさへ、半ば壁にひしがれたまま、つややかに鍵盤を濡らしていた。のみならず大小さまざまの譜本もかすかに色づいた藜の中に桃色、水色、薄黄色などの横文字の表紙を濡らしていた。

わたしはわたしの訪ねた人とあるこみ入った用件を話した。話は容易に片づかなかった。わたしはどうとう夜に入った後、やっとその人の家を辞することにした。それも近近にもう一度面談を約した上のことだった。

雨は幸いにも上っていた。おまけに月も風立った空に時々光を洩らしていた。わたしは汽車に乗り遅れぬ為に（煙草の吸われぬ省線電車はもちろんわたしには禁もつだった。）できるだけ足を早めて行った。

すると突然聞えたのは誰かのピアノを打った音だった。いや、「打った」と言うよりもむしろ触った音だった。わたしは思わず足をゆる

め、荒涼としたあたりを眺めまわした。ピアノはちょうど月の光に細長い鍵盤を仄めかせていた、あの藜の中にあるピアノは。——しかし人かげはどこにもなかった。

それはたった一音だった。が、ピアノには違いなかった。わたしは多少無気味になり、もう一度足を早めようとした。その時わたしの後ろにしたピアノは確かにまたかすかに音を出した。わたしはもちろん振りかえらずにさっさと足を早めつづけた、湿気を孕んだ一陣の風のわたしを送るのを感じながら。……

わたしはこのピアノの音に超自然の解釈を加えるには余りにリアリストに違いなかった。なるほど人かげは見えなかったにしろ、あの崩れた壁のあたりに猫でも潜んでいたかも知れない。もし猫ではなかったとすれば、——わたしはまだその外にも鼯だの墓がえるだのを数えていた。けれどもとにかく人手を借らずにピアノの鳴ったのは不思議だった。

五日ばかりたった後、わたしは同じ用件の為に同じ山手を通りかかった。ピアノは相変わらずひっそりと藜の中に蹲っていた。桃色、水色、薄黄色などの譜本の散乱していることもやはりこの前に変らななかった。ただきようはそれ等はもちろん、崩れ落ちた練瓦やスレエトも秋晴れの日の光にかがやいていた。

わたしは譜本を踏まぬようにピアノの前へ歩み寄った。ピアノは今

目のあたりに見れば、鍵盤の象牙も光沢を失い、覆の漆も剥落していた。ことに脚には海老かづらに似た一すぢの蔓草もからみついていた。わたしはこのピアノを前に何か失望に近いものを感じた。

「第一これでも鳴るのかしら。」

わたしはこう独り語を言った。するとピアノはその拍子にたちまちかすかに音を発した。それはほとんどわたしの疑惑を叱ったかと思う位だった。しかしわたしは驚かなかった。のみならず微笑の浮んだのを感じた。ピアノは今も日の光に白じらと鍵盤をひろげていた。が、そこにはいつの間にか落ち栗が一つ転がっていた。

わたしは往来へ引き返した後、もう一度この廃墟をふり返った。やっと気のついた栗の木はスレエトの屋根に押されたまま、斜めにピアノを覆っていた。けれどもそれはどちらでも好かった。わたしはただ藜の中の弓なりのピアノに目を注いだ。あの去年の震災以来、誰も知らぬ音を保っていたピアノに。